

## 2-5 一酸化炭素（CO）

一酸化炭素は、燃料等の不完全燃焼により発生する。都市の大気中に含まれる一酸化炭素は大部分が自動車排出ガスによるもので、一般に交通量の多い道路や交差点の近くで濃度が高い傾向にある。

### 2-5-1 概要

平成25年度の一酸化炭素の測定は、県下15市町に設置した一般環境大気測定局4局、自動車排出ガス測定局21局、合計25局で行った。一酸化炭素の環境濃度は、一般環境大気で年平均値0.3ppm、また、道路沿道周辺大気で0.4ppmであった。環境基準は、一般環境大気測定局全局及び自動車排出ガス測定局全局で短期的評価、長期的評価とも達成した。

### 2-5-2 測定結果

#### (1) 地理的分布

平成25年度の一般局の測定結果は年平均値で0.2～0.4ppmの範囲にあった。なお、一般局は4局のみであるので、地理的分は省略した。自排局は年平均で0.3ppm～0.5ppmの範囲にあり、平均値は0.4ppmであった。図2-5-1に自排局の年平均の地理的分布を示した。地域的には葛南地域、千葉地域の地点が高いが、他地点との差は小さかった。

#### (2) 月平均値の経月変化

一酸化炭素の月平均値を、平成5年度、15年度の結果と共に図2-5-2、図2-5-3に示した。冬期に濃度が上昇する傾向にあるが、最近はその上昇程度が低くなる傾向がある。

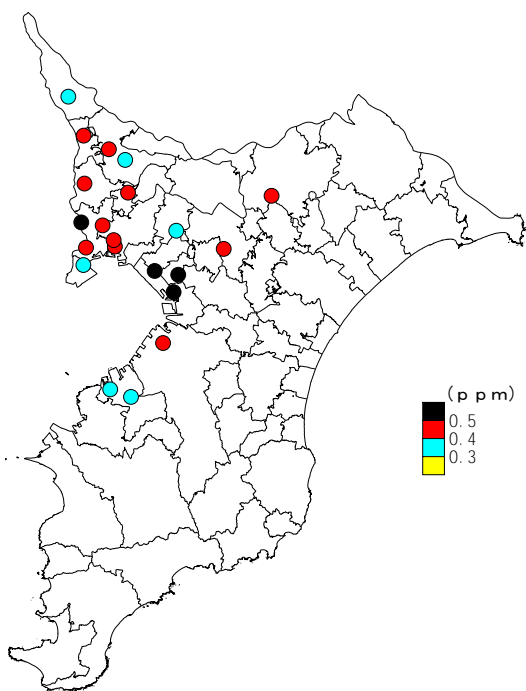


図2-5-1 CO年平均値の分布(自排局)

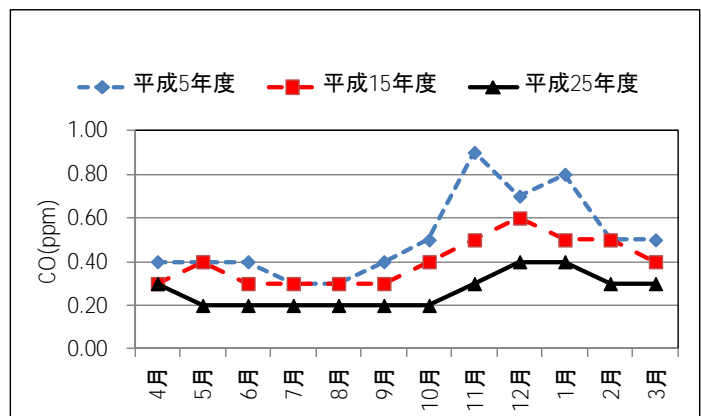


図2-5-2 CO月平均値の経月変化(一般局)

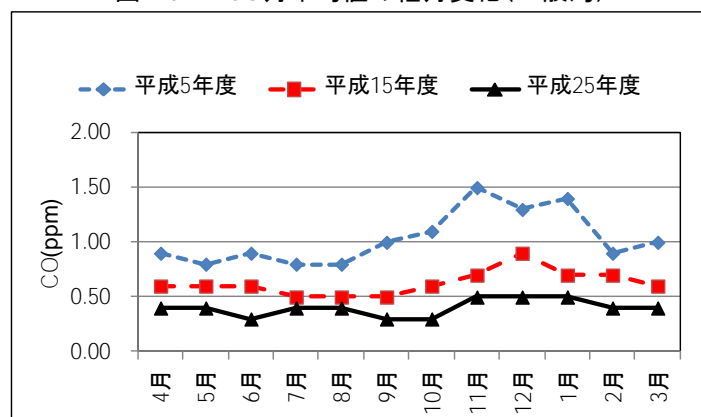


図2-5-3 CO月平均値の経月変化(自排局)

#### (3) 年平均値の推移

一般局について、昭和50年度代から平成25年度まで継続し測定している4局(浦安猫実、市原郡本、成田大清水、成田幡谷)について昭和53年度からの推移を図2-5-4に示した。

浦安猫実局、市原郡本局、成田大清水局は昭和50年度代は1ppm以上を記録するなど高かったが、その後濃度が低下し、平成25年度では浦安猫実局が0.4ppm、市原郡本局、成田大清水局は0.2ppmとなった。成田幡谷局は当初から低く、昭和54年度から平成25年度まで0.2～0.3ppmで推移している。

自排局については、昭和51年度から平成25年度に継続して測定している6測定局について、その推移を図2-5-4に示した。昭和50年代は局間の差が比較的大きく柏旭局、市川若宮局などは濃度が高かったが、これらの局も含めて、濃度が低下し、平成10年度頃からは局間差も小さくなった。平成20年度以降は6局とも0.5ppm付近で推移している。

#### (4) 環境基準の達成状況

環境基準達成率の推移を表2-5-1、表2-5-2に示した。昭和51年度以降、一般局、自排局全局で環境基準を達成している。

#### (5) 年平均値等の濃度上位局

濃度の上位の状況については、濃度差が非常に小さいことから省略する。

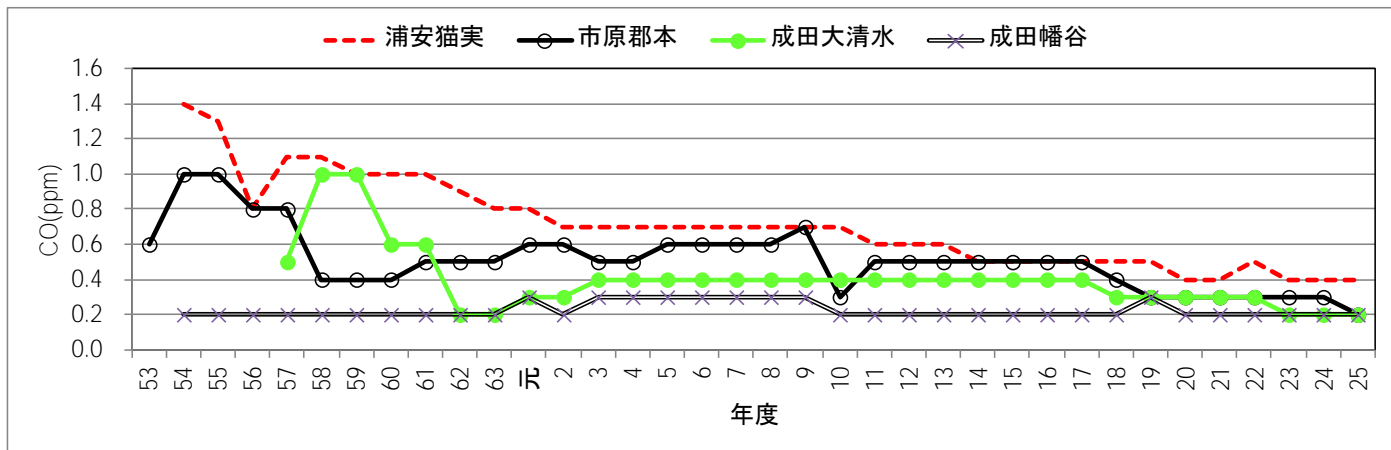


図2-5-4 CO年平均値の推移(一般局)

昭和49年度から平成25年度までの間で20年以上継続して測定していた4局の年平均値。

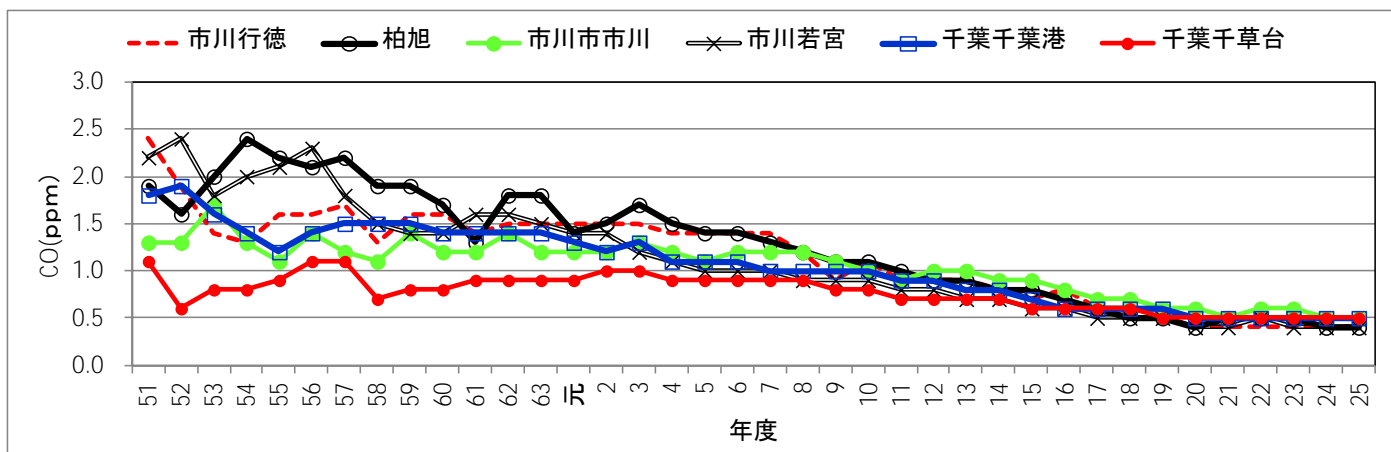


図2-5-5 CO年平均値の推移(自排局)

昭和51年度から平成25年度に継続して測定している6測定局の年平均値。

表2-5-1 CO環境基準達成率の推移(一般局)

区分/年度	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年
短期的評価達成率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
長期的評価達成率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
達成局数/測定局数	5/5	5/5	5/5	4/4	4/4	4/4	4/4	4/4	4/4	4/4

表2-5-2 CO環境基準達成率の推移(自排局)

区分/年度	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年
短期的評価達成率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
長期的評価達成率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
達成局数/測定局数	26/26	26/26	26/26	26/26	26/26	25/25	26/26	25/25	21/21	21/21